

石川島記念病院

症 例 概 要 患者：90歳代前半 女性

病名：右大腿骨頸部骨折

入院期間：令和7年2月下旬 ～ 令和7年4月下旬

経過：令和7年1月下旬にご自宅にて転倒し以降右鼠径部痛が改善しないため12日後に当院を外来受診し、右大腿骨頸部骨折と診断され救急病院へ転院。1週間後に人工骨頭置換術を施行され術後2日後に当院へリハビリ目的で地域包括ケア病棟へ入院となった。約2ヶ月後に自宅退院を果たした。

内 容

入院時、患者さんは術創部の痛みと疼痛による可動域制限があり、下肢筋力（MMT）は2～3と低下。基本動作は、把持物を使用し中等度の介助が必要であった。

また、超高齢で認知機能もMMSE4点と低下しており、見当識障害や幻覚（夜間に動物が見えるなど）があり、「助けてー!」と叫ぶ場面も見られていた。ご家族からは「歩いてトイレに行けるようになってほしい」「自分で歯みがきができるようになってほしい」「今後も一緒に暮らしたい」という強い希望があった。

その希望を実現するため、他職種で情報を共有し、介助量の軽減と介助歩行の再獲得を目指してリハビリを進めた。入院初期は病状の理解が乏しく、「私はどこも悪くない」と離床やリハビリを拒否する傾向が強く、長時間臥床する状態が続いていた。

そこで、認知機能に配慮し、ご本人が受け入れやすい簡単な動作や歩行訓練を中心にリハビリを開始。社交的な性格を活かし、デイルームで他の患者さんと交流できるよう促し、ご家族とも介入時間を調整して、安心できる環境でのリハビリを行った。食事中には、他人に譲ろうとする行動やスタッフへの気遣いから摂取量が低下することがあった。

そこで看護師やケアワーカーと連携し、パーテーションを設けて集中しやすい環境を整え、自分のペースでの食事摂取を支援した。退院に向け、ご家族が安心して介護できるよう家屋調査を実施し、動線や介助方法の指導を行った。

実際の介助体験では、ご本人が満面の笑みを見せ、ご家族も「またお家に帰れるね」と喜ばれていた。

排泄に関しては訴えにムラがあるため、トイレ誘導のタイミングや介助方法、歩行誘導などを多職種で協力しながら指導した。ご家族の介助で歩行が可能となり、介助練習にも熱心に取り組まれたことで、無事に自宅退院が実現した。

ご本人とご家族の思いに寄り添い、多職種と連携し「One Team」となって支援したことで、在宅生活への復帰が叶った症例。

【関わり】

ご家族 ご本人を激励 介助練習へ参加 自宅の準備

医師 良眠できるように内服調整

看護師 おだやかに過ごせるような環境調整や安心できる声かけ

介護士 生活状況の把握、改善案の提案(パーテーション)

セラピスト 自宅復帰に向けて基本動作の介助量の軽減と介助指導、家屋調査での環境調整の提案

MSW ご家族や在宅チームとの情報共有

栄養士 嗜好の聴取、補助食等での栄養調整